

『学問の力』(佐伯啓思著、NTT出版、2006年)

『学問の力』(第1章～第3章)

第一章 学問はなぜ閉塞状態に陥ったのか

1. 「専門主義」と「ポスト・モダン」という不幸

学問の危機／「学際化」のもとでの現実——進行する専門主義化／「専門家」と「知識人」の違い／ポスト・モダンとは何だったのか——「知」の芸能化／「専門主義」と「ポスト・モダン」に共通するもの／ポスト・モダニズムが担いうる「役割」／ポスト・モダニズムに隠された「大きな物語」／構造主義からポスト構造主義へ／「ミシェル・フーコー」という人生——「脱＝主体化」の果てに

2. 教養主義の残照

「教養」への敬意／青年時代のニヒリズムとの出会い／岡潔、小林秀雄、唐木順三／「教養的なもの」と「オタク的知識」の違い／「なぜ」そして「いかに」思想史を学ぶのか

第二章 体験的学問論——全共闘と教養主義

1. 全共闘世代と戦後民主主義

サルトル、マルクス、毛沢東／全共闘時代と現在の大学／マルクスへの違和感／「全共闘的なもの」への違和感と共感／三島由紀夫が良かったこととは何か／「全共闘」の意義——あの時代の一時的な運動

2. 原風景を求める教養

近代日本の「教養」に内在するバイアス／吉本隆明と丸山眞男／「西洋的なもの」と「土着的なもの」の葛藤／全共闘世代の「原風景」

第三章 「知ること」と「わかること」

1. センス・美意識・感受性

数学と文学を支える「美」の感性／教養とは日本文化全体の問題である／「都市化」に憧れた全共闘世代／日本にあった共通の風景／都市と文明、地方と文化／「わかる」と「知る」の違い——ここで考える

2. 「頭がよい」とはどういうことか

「頭がよい」にはふたつある／思想、文体、リズム——小林秀雄の魅力／「感受性の基礎」としての日本文化／「自分にとっての風景」をもつこと

第一章 学問はなぜ閉塞状態に陥ったのか (pp.17-70)

1. 「専門主義」と「ポスト・モダン」という不幸

◇学問の危機

学問・学者の内面から生じる学問の危機（社会科学に限定する）。

学問に関する書物・情報に誰もが容易にアクセスできるようになればなるほど、学問はつまらなくなってしまうのではないか。

学問や知識のあり方は、ひとつの国の状況や社会の価値観と無関係ではない。学問をするということは、社会のなかで生きてゆくということを前提としている。

◇「学際化」のもとでの現実——進行する専門主義化

専門分野化：何らかの新しさ（オリジナリティ）によって成り立っている。しかし、社会や人文科学の学問で「オリジナリティ」ということ自体が奇妙なこと。

〈例〉プラトンやヘーゲルなどビッグ・ネームの研究がやりつくされてしまうと、小型の思想家が取り上げられることになる。「オリジナリティ」という専門的業績の強迫観念のために、「大物」から学び彼らの問題について自分で考える、という学問本来の姿勢が失われては本末転倒。

◇「専門家」と「知識人」の違い

「知識人」は物事を総合的にみて、そこに自分の思想や考えを表明するもの。

「専門家」はある条件のもとで、ある角度からみた限定的な発言をするもの。本来は特定の価値や自分の思想を語らないもの。

専門家の意見は大事。しかし社会の大きな問題について発言する際には、自分が社会のどの側面について発言しているのかを知っていなければならない。

◇ポスト・モダンとは何だったのか——「知」の芸能化

ポスト・モダンの特徴は、専門という垣根を飛び越えて領域を横断し、流儀やスタイルにとらわれないところに自分の個性があるというふうと考えていること。「知」というものを「芸」に変えていくという戦略。「インパクトを与えることができれば有効」という考え方。〈例〉「湾岸戦争はなかった」と発言したボードリヤール。

◇「専門主義」と「ポスト・モダン」に共通するもの★

本当の意味で議論と総合化を避けている。

専門家は異なった分野や考え方との間の議論を避け、総合化する努力も放棄。「総合化できるものではない」という開き直りも。

ポスト・モダン系、現代思想系の議論は、一見すると総合化しているように見えるけれど実際のところそうではない。総合化できないという前提に立って、思いもよらない議論を展開することで既存の考え方を揺るがそうしたりする。

領域を統合するためには「ものの見方」の根本となるものが必要。それが「思想」。思想は常に、ある時代の産物。「絶対的なもの」は存在しない。しかし、真理へ向かおうという姿勢からいなくては思想とはいえない。

そして思想は、他者との対話がなければならない。

◇ポスト・モダニズムが担いうる「役割」

ポスト・モダンとはもともとちょっとした知的な芸。世界を動かせるとか革命を起こせるとかいうものではない。われわれの常識のなかに不協和音を差し込むこと。〈例〉中沢新一『アースダイバー』

知識は、「真理を追究する」「社会の役に立つ」「純粋な楽しみ」の三つに分かれる。もっとも難しいものは、本当は純粋な楽しみ。

◇ポスト・モダニズムに隠された「大きな物語」★

「ポスト・モダン」そのものがひとつの運動だった。その呼び名の中に思想が埋め込まれている。

「近代」とは、歴史をひとつの方向に進歩するとみる意識を含む。

近代主義者は、近代のうちの半面（解放・平等・多様性・自由・個人など）を擁護し、もうひとつの面（規律・道徳・国家など）を批判。

◇「ミシェル・フーコー」という人生——「脱＝主体化」の果てに★

構造主義からポスト構造主義、つまりポスト・モダンへと橋渡しをした思想家。

「人間はシンボルを操ることからできている」という考え方。シンボルの例：言葉。

2. 教養主義の残照

◇「教養」への敬意

今日の学問世界では、学者や研究者などの人と、ポスト・モダンの「知の芸人」がいる。

「教養」とはどのようなものか。

戦前の教養主義では、自分を権威づけるために「教養」を利用。

「人間はいかに生きるべきか」というテーマをどこかに引きずっている。

◇青年時代のニヒリズムとの出会い

知識の権威主義が破壊されたけれど、完全にはなくなっていない頃、「世界の名著」シリーズ。

狂い死にした孤高の思想家・ニーチェに対してシンパシーを抱く田舎の高校生たち。

紺青な海は暗い絶望的なニーチェの思想・人生とミスマッチ。

ニヒリズムは、ある意味で暗いものでも絶望的なものでもない。この世のさまざまなものにわれわれが意味を与えることができる。

◇岡潔、小林秀雄、唐木順三

奈良の偉人・岡潔。小林秀雄との対談『人間の建設』。

小林秀雄の『無常といふ事』、唐木順三の『無常』。日本の思想のなかに流れている「無常観」。

ニーチェのニヒリズムは日本にも古来からあるもので、それこそが「無常」という考え。

唐木順三も西欧のニヒリズムの洗礼を強く受けた思想家。

◇「教養的なもの」と「オタク的知識」の違い

古いタイプの教養主義を引きずる友人。自分の生き方と古典的な教養としての知識を結びつける。

現代のオタクとの違いは、自分たちが読んでいる本は突拍子もないものではなくて、きちんとした「古典」だという意識がある。人類の共有財産のうえにそれなりに安心して乗っかっている。

「教養（的なもの）」はいろいろな知識がバラバラにあるということではない。いろいろなものを読みながらも、結局はひとつの問題をずっと追っていくということ。

「この世の中を構成している原理・法則は何か」「その真理性はどこにあるのか」など。

教養に関して重要なことは、自分が何かを考えるとときに参照できる思想的な軸の獲得すること。

専門分野化によってそれらを勉強しにくくなっている。

◇「なぜ」そして「いかに」思想史を学ぶのか★

大学の授業科目から、思想史などがどんどんなくなっている。

「私とは何か」などの問いが出てくる背景を把握すること。

第二章 体験的学習——全共闘と教養主義（pp.71-109）

1. 全共闘世代と戦後民主主義

◇サルトル、マルクス、毛沢東★

左翼主義が強かった東京大学。サルトル、マルクスの影響が強い。

教養主義と、現実政治にたいする人間的な関与の問題。 アンガージュマン（参加）

サルトルの実存主義「この世界の正義は何か、はわかっている。政治的に正しい行為もわかっている。ただ、家族や仕事などの社会のしがらみにとらわれているために正しい行動ができない」

左翼学生のみならず、進歩派知識人も毛沢東を賛美。

◇全共闘時代と現在の大学

別に当時の学生の大半が全共闘運動に関わっていたわけではない。

時間がたっぷりあり、全共闘の活動をする学生、それに対する批判がある。あれこれ考えざるをえない。

学生のストのせいで授業がなくなり、大学もいよいよ加減だった。しかし教師と議論をする学生など、生き生きとした感覚はあった。

今の大学は管理主義的、商業主義的で窮屈になっている。大学が本来もっているある種のゆと

り、多少世間からずれた滑稽さなどの魅力がなくなっている。

「授業など出なくてもいいから、友達同士で議論したり、一人で本を読んで何か考えたり、大学の外で試行錯誤すればいいじゃないか」という余裕がない。

◇マルクスへの違和感

マルクスの『資本論』。19世紀の労働者階級と1960年代の高度成長の時代の日本では違いすぎる。「資本主義の矛盾」やその結果としての革命は現実から乖離している。

「革命幻想」はすぐついで。学生や知識人という中途半端な立場にいるものは、そんなに簡単に革命運動や社会参加を偉そうに唱えるべきではない。

◇「全共闘的なもの」への違和感と共感

全共闘的なものには、ある種の徹底したアナキズム的な感覚がある。(この世の表層を組み立てているものはインチキだ、など)

学級によって民主主義を学ぶ、となっているが、学級運営はものすごく欺瞞的。あらかじめ先生の頭のなかに正解がある。受験システムも同じ。自分で何かを考えることよりも、何が正解と思われているかをうまく言い当てるものがエリートになる。

本来の知的な営為とは、自分でいろいろな問題を考えること。

声を大きくして発言できない子どもは、学級システムに乗っては自己主張できない。学級、あるいは学校を破壊するしかない。

一流大学に入ったものは、大半はふたつに分かれる。自身のインチキに全く気づいていないものと、気づいており学歴のエリート性にコンプレックスを持っているもの。

◇三島由紀夫がいたかったこととは何か★

三島は作家としては成功していたが、自分に対して、異形のものという意識が常にあった。

申し分のないエリートであったが、普通の意味での凡庸なエリートに対する嫌悪感を抱く。

「戦後を批判するなら、どうしてオレと同じようにしないのだ」という問いかけ。

◇「全共闘」の意義——あの時代の一時的な運動★

全共闘ははたして、戦後日本の正統的な価値体系（民主主義、平和主義、生命尊重主義など）を批判したのか、それとも擁護したのか。

全共闘は、あの時代状況のなかでたまたまできたもの、という印象。

2. 原風景を求め教養

◇近代日本の「教養」に内在するバイアス

近代日本の教養は、ドイツの「ビルドゥング」という発想に近い。「ビルドゥング」は人格形成というニュアンスを含んでいる。

19世紀のドイツはまだ遅れているという後進性の認識が。だから、エリートは英仏の思想や文化を取り入れなければならない、という考え方が基底に流れていた。

他方で、そういうものに対する反動。ドイツ独自の民族性や文化に基づいた思想や表現が大事。日本では戦後、教養は西洋思想のモノマネになってしまう。

◇吉本隆明と丸山眞男

戦後の社会科学の基本は、政治学、経済学、社会学、哲学にせよその中心は西洋の知識の導入だった。

日本の教養主義は表面的に言えば、西洋の知識に通じていること、だった。

進歩的運動の下支えとなった思想は、すべて西洋の文脈でできたもの。

「全共闘的なもの」のなかには、西洋からの学問の輸入に対する反発もあった。暗黙の了解で、西洋的なものによって抑圧された、日本の土着的な感情に対するシンパシーがあった。

それをすくい上げたのが吉本隆明。「丸山は日本の現実を知らないで、大学の講壇における観念を権威づけて語っているだけだ」。

◇「西洋的なもの」と「土着的なもの」の葛藤★

西洋中心の学問と、それを支える東大を中心とした日本の知的エリートイズムへの違和感。

＝近代化、近代主義への違和感。

近代日本に毒されていないと思われた「沖縄」。

◇全共闘世代の「原風景」

全共闘世代は「団塊の世代」。異なるふたつの価値体系に挟まれた世代。

団塊の世代より少し上……戦争体験が強烈に残っている

全共闘世代より10歳くらい下……高度成長の頃に誕生

昭和30年代の日本の記憶。夕暮れの街のさびしい風景、夕食の支度の匂い、風邪を引いても大変な小学生、テレビが家に入ったこと、など。

こうした風景、土地の感覚などは学問、教養と無関係ではない。

西欧的な自由や民主主義、市場競争などどこか体に合わない、という感覚。

「世代」がもっている価値観や雰囲気は無視できない。

第三章 「知ること」と「わかること」(pp.111-144)

1. センス・美意識・感受性

◇数学と文学を支える「美」の感性

『人間の建設』での「知識」と「文化」についての話題。「ものを知る」とは、いかにその国の文化と深く関わっているかということ。

学問は普遍的なもので、それぞれの国の文化に左右されるなどとは考えられない。しかし岡潔

によると、数学ですらその国の文化や美意識と関係している。

自分たちはいかなる文化のなかにおいて、いかなる美というものを引き受けているのか、ということには特に意識しないが、その感受性が数学にも必要になってくる。

そのためには、文化と不可分な「国語」がしっかりしていなければならない。

◇教養とは日本文化全体の問題である

教養はその国の文化と深くかかわってくる。日本人が教養をもてるのかどうかは日本文化の質の問題になってくる。

「わかる」ということもそのこととは無関係ではない。個人の才能や資質だけの問題ではない。

われわれは潜在的に自らの感受性を方向づけるなにかを手に行っている。ある事柄と、その方向が合致したときにわれわれは腑に落ちる。

ある種の感性を生み出す土壌のようなものが、その国の文化と非常に深く関わっている。

いくらプラトンやヘーゲルを読んでも、あくまでもわれわれの時代背景と日本という社会的な状況のなかで読むことになる。

◇「都市化」に憧れた全共闘世代

高度経済成長により、「都市化」が全共闘世代の憧れに。「都市化」した世代。

『ああ上の駅』（昭和 39 年）、『木綿のハンカチーフ』（昭和 50 年）などの歌。

大阪万博のあった昭和 45 年あたりから「都市化」の意味が変化。覚悟を決めた望郷を含んだものから、きわめてあっけらかんとしたものへ。

全共闘世代はその両方の感覚をもっている。

◇日本にあった共通の風景

土着的なものを扱った思想家は、吉本隆明、橋川文三など。だが、思想というよりも感受性として多くのものに共有されていた、といったほうが近い。

〈例〉石川啄木「東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる」

90 年以上前の歌だけれど、われわれも共感できる。

〈例〉寅さん。あまり知られていない小都市や田舎の風景でも、自分の故郷と重ね合わせられる。

昭和 37 年あたりから 47 年ぐらいのご当地ソングブーム。

『木綿のハンカチーフ』では、男女のすれ違いは東京と地方の落差によって作り出されているものだった。現代では、距離がもたらす幻想や想像力、郷愁がなくなり、過剰な自意識に縁取られた繊細さが不必要に距離を生み出してしまっている。

◇都市と文明、地方と文化

「文化」は「cultivate」、つまり「耕す」＝「土地に根ざす」もの。地方性と結びついている。

「地方性がなくなる」＝「文化の衰弱」。「文化」が「文明」になっていく。

「文明」は普遍性を志向するもの。〈例〉近代の科学、産業技術。西洋のコンテクストを飛び越え、アジアや南アメリカなどにも拡散してゆく。

「文化」は文明とは違う。茶道や華道は外国人も興味を持つが、容易に世界には拡散しない。

「都市」は、流れに乗って常に最先端を追いかけて先取りしていく能力はあっても、ひとつのものを耕し時間をかけて育て、自分のものにしていくような「文化」的なものには長けていない。

歴史の重みの中から少しずつ何かを生み出すという文化の力は「都市的なもの」にはない。

◇「わかる」と「知る」の違い——ここで考える

「知る」……文字情報を使って頭の中にインプットすること

「わかる」……思考のプロセスを自分でもう一度追体験すること

再構成できるようになるためには、たえず潜在的にそのことを考えていることが必要。「腑に落ちる」という感覚を身につけること。→でも、腑に落ちた途端無意識のなかに入ってしまうから、自分では「わかっている」ということがわからない。

「頭で考える」のが意識的だとすれば、「ここで考える」のは無意識の思考のとき。

2. 「頭がよい」とはどういうことか

◇「頭がよい」にはふたつある

何でも情報としてインプットされていたり、要点をさっと整理できる人は、厳密に言えば「脳の運動神経がよい」だけ。

鈍くて勘も悪く、鈍重という感じだけれど「頭のよい」人。〈例〉アインシュタイン

潜在的なところでいつも何かを考えている力がある。自分の専門外のことに関しても、素朴だけれど的確な反応を返せる。資質もあるけれど、訓練によるところが大きい。

時代の表層に左右されず、時間をかけて志向を持続させることができる。

◇思想、文体、リズム——小林秀雄の魅力

「頭を使う」方法には決まったものではなく、自分に合ったスタイルを作ることが大切。

〈例〉音楽を常に小音量でかける。余計な情報を入れずに、ものを書いたり考えたりする作業に集中することができる。また、音楽は脳にある種のリズムを与える。

小林秀雄の魅力そのものも、独特のスタイルやリズムにある。

小林秀雄は西洋の近代合理主義は間違っていると主張していた。彼の文体そのものも、西洋の近代合理主義に対する強力なアンチ・テーゼに。

「文体こそが思想」という考え方はきわめてポスト・モダンの。

◇「感受性の基盤」としての日本文化

小林秀雄はドストエフスキーやゴッホについて論じたが、最終的には本居宣長に行き着く。

『カラマーゾフの兄弟』、ソ連の映画では人物像のイメージがかけ離れていた。

こうした作品には、誰もが彼の流儀で読んで影響を受けたり反発したりする、ある程度万国共通の問題というレベルと、その国・社会などそれが生み出されたコンテキストに大きく依存した部分がある。→われわれは、ロシア正教や凍てつく寒さを知らずしてこの作品をわかったと言えるのか。

『源氏物語』の背景は何も知らなくてもわかったような気になってしまう。

結局、われわれは文化の語法のなかで生きている。

知識は、読んだとか読んでないとかいう次元とは違うレベルで、刷り込まれるかのように無意識のうちに蓄積されていく。それが、感受性というレベルにつながっていく。

この「感受性」が、広い意味で日本文化と呼べるようなものによって方向付けられている。

◇「自分にとっての風景」をもつこと

感受性のあり方と、その人の住む場所とは決して無関係ではないように思う。

〈例〉奈良。自然的なものと宗教的なもの、歴史的なものとそこそこ新しいもの、などの調和。

「私自身の感受性は、奈良的な風土性と、私個人としての経験や、私個人の性格といったものがブレンドされたものでしょう」

「奈良」は、最近では具体的な場所そのものというより、ひとつの心象風景。

誰しもそういう風景を持っているはず。われわれが物事をどのように考えるかは、心象風景としての原風景と無関係ではない。

思考は感受性を通して原風景から発して、また最後には原風景へと回帰してゆくもの。